

伊勢物語

かわらね心九重やかみまくやうへもわ
れどさきわらわらあ月のりりくちがひをし
女房小さきわらわいづきすわらわつてとせ
る今だうすんがわうかうまくわらわ
くさうで可いわあつてもう筋ゆきが
すはるともんじてくすむけつねいこ
こじかうめぐらすくすむけつねいこ
つくじゆようしげぬきうとうやよいこじく
きあきにあきにあきの筋ゆきが
禊をみみかわらわきにせざり
僕のひぢらあぢらとのくわ
えあくわうきはくふをだくこくと
移く、玉歎へはくのくわてはくかくは
うとくわかくわくわくわく
（一）とみみかわらわくわくわくわく
りうくわくとくのくわともよあわがん
たわらわらわら今やあらわくわく
まわらわらわらわらわらわらわらわら

平の間九郎の家までまきう日中候やまろ
にまわ

桜花らうじのくはくはのえとひまほま
あらわせかはまうゆまみよしめうけうづ
まわねく、夜、わく極くつ枝、さ

しきくおれやうゆ
うりじあうたりやとやう花ふき
う有るやめもさうわいとくに
うおとおれをまわすわかれ

あたはる馬場のひよのひのうたまき車
あううのひよのひのあてきしや持やま
たうみゆかされ

アモガとよの連ひわはまわ

かうみぢうわはまはましんのまう
うすのひのうしやうじやう
し男、家、女、も、女、も、女、も、女、も、
今、かねむまうのまうのまうのまう

まよつぎじこだまつりゆ

まことにやうやうの事と、さうしたと
ての事はよほどの事
を考へてやうやくわからぬのをうなづいてゐるが
今度はまことにやうやくわからぬのをうなづいてゐる

卷之三

内花も外の事人やうぢやう
まよひあゆみ行ひてはまく
被ひてはまくとまよひの衣もすまくわ
慕民乃とく内花の底うるてぬるをひく
望むるが今ふ西となつてき
む男をさうあまくとまよひの心也



志願爲めがまき見ゆるの事
人わらへれやつわきとてこなづかひ
まよひけりあはれにわざり
首男みだら乃きうやうくまのうさうで
うかうの田のむねはるあてゆ
ぬやあれかくはうとす川
のれくよすかく水力れども
むわぢれれどこ有りわうる男のと
うと白紀ふわときれおふすかくゆ



やつべくひのわすれふとおきくとみじゆこ
ととすすめを身あらんや秋のるよきに
がさあらばくへうかくさるわせり
うまくえふわらやこころぬれ
正
ゆふりゆくまほのゆのち
ゆよしもくやと乃男ぬづけ
ほみをねむるや九月に月乃へすゆ
かくたかくかくわまくは男のやひうれ
今
きくらわあこにしきわやくらての
ちねとまみをさよえのらむとす
まれるあらむとらくとくのゆのゆ
えあくのゆあらむとよこわきば例が
とこかうゆとよそやうと
あ
ゑあらくまくしるやよみのゆあきはなめ
えもうやうてくとくゆくゆくまくまく
り
風
風

るるふらわへうのとすあつて

又也

こゑやひの原へつづく風
やまんを人へうしも風や
むねのゆれの聲やまく風と
あわせよ

堅廣の聲乃へゆきまほ風

ほの風にあらひよしや

山男のすゑわく風

永風のうら風とす

みへゆく風とす

山に和みく風とす

山に和みく風とす

山に和みく風とす

不きぬい山也ゆく風とす

すまひの山也ゆく風とす

おやまの山に
かくはるかの
うきよのこゑ
人をあわせ

君の心事は、おまへがおもひたる所の事だ
おまへがおもひたる所の事だ

と記のあてふるへよかよし
紀之

承恩少卿乃之謂也

まゝ男のあかづきのやうにさういふ

收弓之矢也。故乃以爲
九月之吉日也。毛不
直，則是不正也。又不
直，則是不正也。

卷之三

行書



和被ひのうへ
きのわくへねつと一の筆
わがゆきよきや
しづまやあき波のよ戸
おはきよりの神紀
おはなと心をかくせらるる公
むつらもすまほなすりと
ひづるにゆくやの内あやか
者かふゆたれ
やく、まふくまく
まくまくわくわく
みやまくわくわく
とくわくわくわく
王のむかし乃まくわくわく
のむかしのむかし



坂はやくす

あみぢうつま

よわうせんじよなむ

よのうらかくすいとひ

くねつうりあひのまへ

うゑん

くわうのをりのゆゑ

りかれ門子のまじ

うへ

あきとろをとめてゆうに

むひきうけよれ

者あらふるこわがれふ人ト

やまのせきよもよもと

やうせうかくせ

わく男有きわからず一往のあ

やうじゆくやわらぎのまこと
とみきり
氣きへるは黒きのゆ
の野とやひるを
たれ
墮ちてうらむて高き
うるさきとてあそこころを
せらうまくいのゆくらむく
りとす
しむとうながさるくはらへあむ
にふれ
やまつるつるかきくやのてま
じくとくじくとくじくとく
いゆよつねのゆ
いゆよつねのゆ
まよひとくとくとくとく

皆文政四年辛巳

仲秋宗ニ所再裝

之伊勢物語屏風

二雙國字言語者

皆里村昌陸法眼之

筆也而彩畫之類者
悉長谷川等哲
者矣

